

外国語教育メディア学会 (LET)
関西支部 2013 年度春季研究大会
発表要項集



日 時： 2013 年 5 月 11 日 (土) 9:30~18:10

場 所： **同志社女子大学 今出川キャンパス**
Doshisha Women's College of Liberal Arts
〒602-0893 京都市上京区今出川通寺町西入
<http://www.dwc.doshisha.ac.jp/>

主 催： 外国語教育メディア学会 (LET) 関西支部
<http://www.let-kansai.org/>

事務局： 〒577-8502 大阪府東大阪市小若江 3-4-1
近畿大学経済学部 菅井康祐研究室内
Tel: 06-6730-5880 (内線: 7070)
E-mail: kansaiet@gmail.com

プログラム

- 9:30-16:00 受付■純正館(S) 1階ロビー
- 10:00-10:20 開会行事■S013 教室
司会◆菅井 康祐 (事務局長・近畿大学)
挨拶◆加賀 裕郎 (同志社女子大学・学長)
挨拶◆若本 夏美 (支部長・同志社女子大学)
- 10:20-11:40 ワークショップ1■S204 教室 (当日先着順で30名まで)
講師◆木村 修平 (立命館大学), 近藤 雪絵 (立命館大学)
電子語学教材開発研究会「“いろは歌”で作る EPUB 教材:理論と実践」
- ワークショップ2■S203 教室 (当日先着順で30名まで)
講師◆吉田 晴世 (大阪教育大学), 乾 まどか (聖母被昇天学院中学高等学校),
長谷川妙子 (関西学院千里国際中等部・高等部)
「Moodle・ML等を利用して Hot potatoes を授業に取り入れましょう」
- ワークショップ3■S105 教室 (人数制限なし)
講師◆北村 友美子 (関西学院大学), 石丸 詩乃 (こども英語教室えいごのくに)
早期英語教育研究会 “Let’s play with songs and Jazz Chants!”
- 10:20-16:30 業者展示■純正館1階ロビー
- 11:40-12:40 昼食・休憩■純正館1階ロビー
運営委員会■S015 教室
- 12:40-13:10 支部総会■S013 教室
- 13:20-16:10 研究発表・実践報告・教材開発
① 13:20-13:50②13:55-14:25③14:30-15:00④15:05-15:35 ⑤15:40-16:10
第1室(研究発表・実践報告)■S103 教室
司会◆深田 将揮 (畿央大学)
① 単語学習ソフトを利用した課外語彙学習
成田 修司 (大阪経済大学)
② Kindle と Weblib がひらく語彙学習の新しいスタイル
東 淳一 (順天堂大学)
③ Educator Perceptions of Digital Game-Based Learning for Foreign Languages in Japanese
Higher Education
Stephan J. Franciosi (Pepperdine University, Doctoral Program in Learning
Technologies)
④ 大学でのオーラル系授業における Glexa の導入
浦野 研 (北海学園大学)
⑤ 反応スピードを高める反復学習プログラム
松田 成弘 (神戸市立楠高等学校)
- 第2室(教材開発・実践報告)■S104 教室
司会◆泉 恵美子 (京都教育大学)
① Does Blogging Offer Students Benefits? - A Survey of Learners Opinions -
Harry F. Carley III (Matsuyama University)

- ② Developing an online course for improving English pronunciation
Mathew Porter (Hiroshima Bunkyo Women's University)
- ③ CALL クラスにおける海外の大学生とのブログ交流と異文化理解
塩見 佳代子 (立命館大学)
- ④ 多文化共生に必要な視座を育てるには？
フィゴーニ 啓子 (武庫川女子大 (非))
- ⑤ 海外大学と成果を伴うオンライン交流を行うには——問題の追究とその解決案——
松島 和佳子, 篠崎 文哉, 上田 愛, 鈴木 翔大, 武部 俊輔 (大阪教育大学
大学院生)

第3室 (教材開発・実践報告) ■S105 教室

司会◆佐藤 臨太郎 (奈良教育大学)

- ① 動機づけを高める授業の中の有能感：質的研究による検討
田中 博晃 (広島国際大学)
- ② 日本人高校生の英語自己効力感を高めるとされる sources の感じ方
田原 理恵 (関西大学大学院生)
- ③ 日本人 EFL 学習成功者の自己調整学習方略と目標への関与に関する事例研究
吉田 ひと美 (同志社女子大学)
- ④ 高校英語検定教科書の語彙
古樋 直己 (国立津山工業高等専門学校)
- ⑤ 教員養成課程専門科目における教授内容知識の学習過程
亘理 陽一 (静岡大学)

第4室 (教材開発・実践報告) ■S106 教室

司会◆大塚 朝美 (大阪女学院大学)

- ① フォーミュラ連鎖の反復学習が文産出の流暢性と正確性に与える影響
下吉 真衣 (関西外国語大学 (非))
- ② 記号研方式に特化した言語構造式描画ソフト「LangDraw 記号研 ver.」の試作
木村 修平 (立命館大学)
- ③ 日本人学習者の語彙の流暢さと正確さを測定する語彙性判断テスト
松尾 徹 (近畿大学 (非))
- ④ Suspicious Activity in Extensive Reading: Student and Teacher Perspectives on using Moodle Reader
Derek R. Eberl (Juntendo University) & Aaron P. Campbell (Kyoto University of Foreign Studies)

16:10-16:25

休憩

16:30-18:00

基調講演 ■S013 教室

「大学用発信型英語教材を用いた授業案」

講師紹介◆深田 将揮 (畿央大学)

講師◆斎藤 兆史 (東京大学)

18:00-18:10

閉会行事 ■S013 教室

司会◆菅井 康祐 (事務局長・近畿大学)

挨拶◆吉田 晴世 (副支部長・大阪教育大学)

18:30-20:30

懇親会 ■同志社大学寒梅館 7F : SECOND HOUSEWILL

司会◆今井 由美子 (同志社女子大学)

大学用発信型英語教材を用いた授業案

斎藤兆史（東京大学大学院）

英語教育をめぐる議論は相変わらず百家争鳴の状況にあるが、議論は教授法、評価法、あるいは教育理念に集中し、教師が英語使用者としての手本となって学習者に高度な英語を伝授するという、きわめて健全な授業のあり方が顧みられることがなくなった。また、英米の文化的支配を離れた国際共通語としての英語、発信型英語教育などといった理念を唱えつつ、相変わらず英米で作られた教材を用い、英米で開発された英語力認定試験で自らの英語力を測り続けている矛盾に多くの日本人は気づいていない。この講演では、発信型英語教育の本来の意味に立ち返り、日本人大学英語教師が書いた文章を主たる教材とし、それを視聴覚教材と組み合わせてどのような授業をすることが可能かを、事例を交えて論じたい。

1. 日本の英語受容・教育史を踏まえた英語教育の現状分析
2. 問題点の議論
3. 日本の英語教育の改善案
4. 発信型英語教育の実践案
5. まとめ

"いろは歌"で作る EPUB 教材:理論と実践

木村修平 (立命館大学)

近藤雪絵 (立命館大学)

ワークショップの目的

このワークショップの目的は、電子書籍の標準フォーマットとして広がりつつある EPUB について、理論的理解と実技的实践を通じてその仕組みを理解し、参加者による今後の語学教材作成に役立ててもらふことにある。

ワークショップ前半: EPUB の理論的理解

ワークショップの前半では、EPUB というファイル形式についての技術的な理解を深める。EPUB はアメリカの IDPF (International Digital Publishing Forum: 国際電子出版フォーラム) によって普及が促進され、特に英語圏では電子書籍の事実上の標準規格となっている。電子書籍のオーサリング (作成や編集) と言うと難解に聞こえるが、EPUB は、HTML と CSS を用いた一般的な Web サイト制作プロセスに類似している。EPUB 制作と Web サイト制作の違いは、EPUB では、最終的にコンテンツを ZIP で圧縮してひとつのファイルにする点である。

また、前半では、EPUB オーサリングのためのソフトウェアやサービスについて具体的に紹介する。特に、インターネットを通じて利用できるオーサリングソフトやサービスについて紹介する。次に、作成した EPUB ファイルの閲覧に用いるソフトウェア (ビューワ、ビューア、リーダーなどと呼ばれる) について言及する。どのビューワを用いるかは端末の種類や OS に依存する。たとえば Apple 社の製品であれば iBooks というビューワが、Android 端末であれば Aldiko Book Reader などのソフトが広く利用されている。前半の最後では、多人数に向けて効率よく EPUB を配布する方法として、クラウドストレージの利用方法などを具体的に紹介する。

ワークショップ後半: "いろは歌"を題材に EPUB 教材を実際に作る

ワークショップの後半では、EPUB オーサリングソフト「Sigil」を用いて実際に参加者の方々に EPUB ファイルを作成して頂く。Sigil は、Google Code 上で公開されているオープンソースの EPUB オーサリングソフトであり*、無償で利用することができる。

まず、Sigil というソフトの基本的な使い方を説明する。ファイルの新規作成から EPUB ファイルとして保存するまでのステップを概観する。次に、事前に講師が用意したいろは歌を題材にした教材のテキストデータをコピー・アンド・ペーストで Sigil に入力し、CSS を調整するという、EPUB 作成の基本を知って頂く。

また、音声ファイルや動画ファイルを挿入することで、EPUB のマルチメディア再生機能についても実際の編集作業を通して体験して頂く。EPUB の最新バージョンでは次世代の Web プラットフォームである HTML 5 のタグが利用できるため、動画や音声を極めて単純なタグでファイル内に埋め込むことができる。

最終的に、後半で作成した EPUB ファイルがビューワを通してどのように表現されるのかを確認して頂く。ここでは、CSS の設定が Sigil 上とビューワ上でどのように反映されるか (あるいは反映されないか) やリフロー機能に着目し、EPUB で作成した電子教材のメリットとデメリットについて検討する。

*Sigil プロジェクトサイト <https://code.google.com/p/sigil/>

Moodle・ML 等を利用して Hot potatoes を授業に取り入れましょう

吉田晴世（大阪教育大学）

乾まどか（聖母被昇天学院中学高等学校）

長谷川妙子（関西学院千里国際中等部・高等部）

Hot potatoes は、カナダのビクトリア大学が開発した練習問題作成ソフトで、自動採点されるウェブ上の練習問題を、簡単に作ることができます。現在、公開されている Hot Potatoes Version 6 は多言語対応なので、日本語で問題を作ることもできます。このソフトは、Hot Potatoes のホームページからダウンロードできます。インストールが必要ですが、多機能なのが特徴で、使用登録して使うといろいろな機能が使えます。

Hot Potatoes では、多肢選択(multiple-choice)、穴埋め (gap-fill exercises)、マッチング (matching/ordering)、並べ替え (Jumbled-sentence)、クロスワードパズル (crossword)、の 5 種類の練習問題とその統合問題を作ることができます。使っているコンピュータの OS やブラウザによっては使えるソフトに制限がありますが、本ワークショップでは、クロスワードパズル、穴埋め、マッチングの 3 種類を紹介します。実際に練習問題をやってみて紙ベースの練習問題とどこが違うか比べてみてください。

Moodle は、オンラインで授業を行うために開発されたシステムですが、ユーザ管理の機能がしっかりしており、また、さまざまな機能が備わっているので、いろんな用途に応用が可能です。プラグインが多数公開されており、独自プラグインの開発が容易なことも魅力です。Moodle は、GNU GPL (General Public License) の下で配布されているオープンソース LMS (Learning Management System) です。LMS とは、学習運営システム (または学習管理システム) とでもいうべきもので、インターネットを利用した学習・教育を実施する場合に、中核となるシステムです。Moodle はオーストラリアの Moodle Headquarters とコミュニティで開発および保守が行われています。Moodle の最大の特徴は、そのコミュニティの規模が大きいことです。世界中に多くのユーザと開発者がいて、大変活発に意見交換や共同開発が行われています。公式サイトも Moodle を用いて構築されています。日本においても、Moodle は大学や高専から広がり始め、今では多くの場所で利用されています。Moodle では、まず「コース」(1 科目に相当する領域) を作り、その中に「リソース」や「活動」と呼ばれるものを設置します。教材ページ作成・公開については、Web サーバへのアップロード方法や HTML 等についての知識がなくても、簡単に教材ページを作成・公開できます。

メーリングリストとは、メールを使って大勢の人とコミュニケーションすることができるシステムのことです。ML 用に設定されたアドレスにメールを送ると、ML に参加している人全員にメールが配信されます。送られてきたメールに返信をすれば、そのメールも参加している人全員に送られるので、複数のユーザ同士での情報交換がとても簡単に行えます。

ワークショップでは、前半は簡単な教材作成をハンズオンにて体験して頂き、後半は Moodle やメーリングリストを使っての授業実践を紹介します。さらに、有効性に関しては、学習記録、テスト結果、授業観察、アンケートなどにより得られた結果をお伝します。フロアとの双方向の意見交換を期待します。

Let's play with songs and Jazz Chants!

北村友美子（関西学院大学 非常勤講師）

石丸詩乃（ジャズチャンツ・ユニオン）

早期英語教育では、英語の歌やチャンツを用いて楽しく英語の表現やプロソディに慣れ親しませることが一般的です。本ワークショップでは、このようなことに加えて、人と関わる楽しさ、自己表現、セルフエスティームにも焦点をあて、「子どもが喜ぶ、子どもが覚える、英語のわらべ歌やジャズチャンツ」を特別なテクニックを駆使して紹介します。ワークショップ前半にジャズチャンツ、後半にE T M (Education Through Music) の英語わらべ歌遊びをご参加の皆様実際に体験していただき、それぞれのセッションでそのプログラムを支える理論やテクニックをお話しいたします。

1. ジャズチャンツ

“Jazz Chants ©”とは、Carolyn Graham によって考案された「アメリカ口語英語と伝統的なジャズを融合させてできた英語教授法」です。(Jazz ChantsはOxford University PressによってJazz Chants©は商標登録されているため、他社からはChantsまたはPoemとして出版されています。)GrahamのChantsは用意された文を単調に詠唱するだけでなく、ジャズ特有のリズムやcall and responseの掛け合いのような体系で1.Sound (Rhythm) 2.Grammar(文法) 3.Useful phrases (日常会話) 4.Vocabulary (単語)を覚えられることが特徴です。本ワークショップ前半では、テキストにあるチャンツを暗唱しCD通りにできることを第一の目標にするのではなく、その内容を考えたり工夫したりしながら仲間と一緒に遊びを進め、チャンティングする楽しさを味わう活動を通して、学習者一人ひとりが自信を持って表現できる環境を整える為のテクニックを提案します。

2. E T M (Education Through Music) による英語の歌遊び

200曲あまりの英語わらべ歌により構成されているE T Mは、1960年代後半にアメリカで音楽教育の手法の一つとして始められ、現在では総合的な全人教育プログラムとして発展しています。日本においてE T Mは、英語を教える為のプログラムとしてではなく、子どもたちの中にある言語、音楽、数学、運動、空間把握などの能力を育て、自主性、自己肯定感、協調性、社会性、創造性、美的感性など、子どものもっている様々な力を引き出して行くことを目指したものとして保育園、幼稚園、小学校、教員養成系大学等で取り入れられています。本ワークショップ後半では、このE T Mの歌遊びを通して、楽しいだけではない、英語を覚えることが目的だけではない「歌遊びや歌の指導」について体験していただき、そして、保育園から大学までのどのレベルにおいても、またどのような歌指導にも応用ができる、歌遊びのテクニックを知っていただきたいと考えています。

単語学習ソフトを利用した課外語彙学習

Extracurricular activity using a vocabulary training software

成田修司（大阪経済大学 非常勤講師）

キーワード：語彙学習ソフト、課外学習、授業連携

単調で時間のかかる語彙学習を課外時間に自習してもらい、教員がその進捗を把握する試み

読解と作文を中心とした大学一年生の英語クラスで語彙力を増強するために、それまでの書籍版単語集の利用に変えて、単語学習ソフトを1年間利用した実践報告である。パソコンソフトの書籍版に対する利点は、時間制限のあるクイズ形式で習熟度を確認できる、個々の学生の学習履歴を教員が確認できる、フリーソフトであるため費用がかからない等がある。逆に不便な点としては、課外時間に実施するには学生個人所有のパソコンがないとやりにくい、授業中に実施するには大学のパソコンにインストールが必要で、しかも学生用パソコンのある教室が必要等の点がある。当該授業では語彙学習自体は主に課外時間に行うものとして、授業時間では定着度確認にとどめた。学生が課外時間に大学のパソコンでも学習できるようにと、ソフト作者の許可と大学の協力を得て、パソコン自習室にソフトをインストールして自由に利用できる環境を整えた。ソフトの収録語彙は和訳付きでプリントアウトもできる。

評価方法であるが、毎週の授業までに学習を済ませるべき範囲を学期開始時に配布して、同じ範囲の語彙を授業時間に○×式のカードを使って答えさせた。○×式ではたとえ知らない単語でも理論上1問あたり2分の1の確率で正解するが、数問出題して全問正解する事で学習したとみなして評点を与えた。またソフトに学習履歴が残るため、毎回の指定範囲までの学習履歴をプリントして持参するとボーナス点加点とした。1年間で1000語の語彙サイズアップが目標であるため半期で500語だが、初回やテスト時など実施しない週を除くと週あたり40語程度の学習量となる。

調査参加者は大阪市内の私立大学、2011年度1年生1クラス14人である。英語は彼らの必須科目であるが、専攻する参加者は含まれていない。1年間の語彙サイズ変化は当該ソフトとは収録語彙が異なるオンライン単語テストで確認した。このテストは語彙レベル3000語範囲から30問のランダム出題になっていて、参加者はそれぞれ異なる語彙でテストを受けている。参加者全員の平均増加語彙は30問中3.14語であった。ただし彼らは他にも英語の授業を受けており、厳密に条件を揃えた対照群も存在し無いため、この増加分は参考程度と考えるべきである。発表当日は実際にソフトを立ち上げ、利用方法の簡単なデモも実施したい。

Kindle と Weblio がひらく語彙学習の新しいスタイル

New Style of Vocabulary Learning with Kindle and Weblio

東淳一（順天堂大学）

キーワード：語彙学習, Mobile Learning, Kindle, Weblio

医学部，法学部，あるいは工学部などで ESP として英語の授業を実施する場合，学習者にとっては多量の専門用語を学ぶことが大きな壁となる。そして同時にそれら専門用語を効率的に学ぶことが，学習上の非常に重要な課題となる。本発表では，オンライン辞書としてポピュラーな Weblio のクラウドサービスを利用して単語帳をオンライン (<http://uwl.weblio.jp/word-list>) で作成し，自分の単語帳の語彙データを Firefox または Chrome ブラウザに対応したブックマークレット (<http://en45masao.appspot.com/bookmarklets.html#weblio-csv>) を通じて CSV 形式のデータに書き出し，その後さらに Excel にインポートして加工したデータを iPhone や Pod Touch 用のアプリ (Flashcards Deluxe : 有料, 300 円) に移してフラッシュカード的に語彙学習を行う方法を紹介する。実は，最初の Weblio の単語帳への単語登録については本を読みつつパソコンで単語，説明の入力も勿論可能だが，iPhone, iPod Touch, iPad の Kindle アプリを使って本やパーソナル・ドキュメントを読みつつ，未知の単語に遭遇するたびにその場で Weblio の単語帳に語彙を登録することができる。

一方，これに関連して，Klip.me (<http://www.klip.me>) というツールを使うと，Web ページの内容をワンクリックでそっくりそのまま自分の Kindle パーソナル・ドキュメントに変換できることが知られている。医学関係でいえば PubMed Central (<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/pmc/>) などに掲載された無料のフル論文を Klip.me ツールを使って瞬時に自分の Kindle パーソナル・ドキュメントとして変換・送信し，それを Kindle アプリ上で受信して読書可能である。そして Kindle アプリを使って読書をしている間にも，上記の Weblio への単語登録という手順を実行することが可能である。この過程において，Flashcards Deluxe アプリ用データの作成部分のみパソコンでの作業が必須となるが，それ以外の部分では基本的にすべて iPad などの PDA だけで作業可能である。また，その際にバックグラウンドで行われる処理はすべてクラウド上で行われる。

電子書籍でコンテンツを読み，未知の単語をそのまま PDA で調べてオンラインの単語帳に登録するというプロセスは新たな Reading 学習スタイルの始まりを示唆するものである。また，登録された単語帳を変換してさらにこれも PDA で閲覧することもできるため，このような学習スタイルは，外国語学習における今後の Mobile Learning のあり方に大きなインパクトを与えると考えられる。

Educator Perceptions of Digital Game-Based Learning Solutions for the Instruction of Foreign Languages in Japanese Higher Education

外国語教育用のコンピュータ・ゲームに対する日本の大学教員の認識

Stephan J. Franciosi (Pepperdine University)

Key words : Digital Game-Based Learning, Diffusion of Innovation

Abstract

Digital Game-Based Learning (DGBL) is an innovative educational approach that is becoming increasingly popular among researchers and practitioners in technologically advanced countries in the West. Although DGBL does not present a fully matured or universally recognized discipline, the approach is a promising one that is supported by major theories of learning and a growing body of empirical evidence indicating efficacy. However, DGBL is largely unknown or ignored in the instruction of Foreign Languages (FL) in Japanese higher education. This is problematic because more interest in research and implementation among faculty in Japan would likely contribute to the development of DGBL and improve the quality of FL education. The purpose of the proposed study is to better understand the lack of interest in DGBL in Japan by exploring the perceptions of DGBL among FL faculty in Japanese higher education.

大学でのオーラル系授業における Glexa の導入

Introducing Glexa to a university oral communication class.

浦野研（北海学園大学）

キーワード：LMS、リスニング&スピーキング、教室外活動

大学における英語を専門としない学部の英語教育は、通常週 1 回 90 分で開講されるため、英語コミュニケーション能力の養成に必要なインプットとアウトプットの機会を十分に供給することは難しい。そこで、教室外で英語に触れる時間を確保することが重要となり、その目的で LMS を活用した実践も多い。

発表者はこれまで、Moodle やブログを利用して教室外での英語使用を促す実践を行ってきた（e.g., 浦野, 2010, 2012, 2013）。オーラル系の授業ではリスニングとスピーキングの課題が中心で、リスニング課題については Moodle 標準のテスト機能を利用して、ビデオや音声教材について理解度チェックやディクテーションを課してきた。一方、Moodle は標準で音声の録音機能を備えていないため、スピーキング活動については NanoGong プラグインを利用して、発音練習や掲示板による音声での意見・情報交換活動を行ってきた。

NanoGong は利用方法が直感的でわかりやすいが、プラグインであるため Moodle が利用できる環境であっても別途インストールの必要がある。また、JAVA アプレットであるため、OS やインストールされている JAVA のバージョンの違いによって正常に動作しないこともあり、トラブル対応に一定の労力を奪われる。そこで発表者は、音声の録音機能を標準で実装した Glexa への移行を試験的に行っている。Glexa は（株）VERSION2 が開発した LMS プラットフォームで、対面授業の拡張を目的とし、音声録音のようなマルチメディア機能を標準で実装している。動画や音声ファイルの途中に質問を埋め込んだり、解答方法として音声入力を選択できたりと、Moodle や NanoGong には見られない機能もあり、教室外活動をよりインタラクティブにする可能性を持っている。

本発表では、発表者が担当するオーラル系授業における Glexa の活用事例を報告する。教室外のリスニングおよびスピーキング活動に利用できる Glexa 独自の機能をいくつか紹介し、発表者がこれまで Moodle および NanoGong を利用して行ってきた活動が、Glexa にどの程度移行可能かを検証した結果を報告する。

参考文献

- 浦野研. (2010). Fluency 獲得を目指した教室ライティング活動におけるブログの利用. 北海学園大学学園論集, 第 145 号, 15-30. Retrieved from: http://bit.ly/urano_2010_blog
- 浦野研 (2012). Moodle を利用した教室外スピーキング活動. 外国語教育メディア学会第 52 回全国研究大会 (甲南大学).
- 浦野研 (2013). NanoGong を利用して教室外でスピーキング活動を行う. 中西大輔・大澤真也 (編著), Moodle 事始めマニュアル: Ver.1.9 および 2.4 対応 (pp. 178-180). Retrieved from: <https://sites.google.com/site/ozawashinya/elearning/moodlemanual>

反応スピードを高める反復学習プログラム

Repeated Learning for Enhancing Response Speed

松田成弘（神戸市立楠高等学校）

キーワード： 反復学習プログラム 反応スピード 習得プロセス

コミュニケーション能力に通じる反復学習

外国語学習では反復学習により記憶の定着化をはかるが、この記憶をコミュニケーションに通じる能力にするためには、反応スピードを高める必要がある。このことは基本的な例文を記憶するときに顕著である。例えば、「ちょっと見せてください。」と言いたいときに、即座に“Let me see it.”と言えなければ、会話は成立が難しい。また定型表現の暗記だけでなく、has と have の使い分けなど文法的な操作でも、反応スピードが求められる。

認知科学では反復学習で反応時間が短くなることはよく知られている。従来の外国語学習では、反応スピードを高めるためには、実際にネイティブと会話をするあるいはネイティブの会話の録音を手本として使い、同じスピードで発話できるようにするというものが一般的であった。しかし、これらの方法では効率よく段階的に反応スピードを高めていくことは困難である。

反応スピードを高めるプログラム

そこで反復学習において、段階的に反応スピードを高めるプログラムを考案した。例文が1つであれば、その例文だけを繰り返し反復学習すれば、日本語を見て、すぐに英語を発話できるようになる。問題は、ある程度まとまった数の例文を、どの例文も素早く発話できるようになることである。そのためには、どの例文をどのタイミングで反復学習するかを判定しなければならない。このプログラムには次の1)～3)のステップが存在する。

- 1) 基準反応スピードを作成するステップ
- 2) 許容反応時間を設定するステップ
- 3) 学習の反応スピードを判定するステップ

コンピュータを活用した実践報告

本発表では実際に、このプログラムで自己学習した中学生と高校生の2名の実践報告を行う。課題は中学レベルの例文100個全体を日本語に反応して素早く英語に変えることができるようになることである。復習段階が進むにつれて、「反応スピード」「正答率」「課題の難易度」が時間軸でどのように変化していったかを示す。このデータから異なった学習レベルの被験者が同じ課題をこなしていくとき、習得プロセスがどのように異なるのか、また学習プランがどのように変化していったかを報告する。

参考文献

- 門田修平.(2012). 『シャドーイング・音読と英語習得の科学』: コスモピア.
松田成弘.(2013). 「なぜ生徒は英単語を覚えられないか」『ET Network』:
神戸市立高等学校教育研究会英語部会誌

使用ソフト

『単語力完全マスター』(2009): コベック.

Does Blogging Offer Students Benefits?

A Survey of Learners' Opinions

ブログは学生のライティング能力を伸ばすために効果的か？

Harry Carley (Matsuyama University)

Key words: Blogging, EFL, ESL, Japan

Abstract: Modern technology has embedded its way in to language learning. Mobile computing instruments, software, apps, and other teaching devices are common practice in language learning classrooms today. Most students possess some sort of mobile computing device and carry it with them at all times. This presentation will introduce Edublog., an internet teaching tool that allows opportunity for continuous learning inside as well as outside the classroom. This can allow for a perpetual stream of learning. Edublog, as one of these learning tools is a free and secure means of allowing students to write down their thoughts or complete class tasks anytime, anywhere. In an English communicative language course students were first introduced to blogging as a way of encouraging them to write down their thoughts and feelings. Assigned writing tasks were also given to measure understanding and to promote interaction among course members. Learners were assigned blogging teams of 2 to 3 members to review and comment on each other's blogs. After the initial few blogging lessons the students were assigned homework tasks and encouraged to blog outside of class time. The remaining lessons were in a classroom with a prescribed text and CD for communicative practice; at the end though it was questionable if there was any actual merit to blogging since results were not easy to measure. At the conclusion of the courses a survey was conducted with 88 students in five 2nd year English courses at Matsuyama University, Ehime to assist in garnering their opinion. This presentation will offer a brief explanation of Edublog. a free and secure internet blogging tool, results of the student survey, and the instructors own impressions and thoughts of conducting such lessons. The benefits and disadvantages will be conveyed to assist future instructors who may be considering adding such a similar instructional tool to their teaching methods.

Independent study of English pronunciation using a Moodle course

Moodle を活用した英語発音自律学習

Mathew Porter (広島文教女子大学)

キーワード：発音学習ストラテジー、自己モニタリング、コンピュータ支援語学学習

Developing pronunciation skills

This presentation describes three stages of an action research project involving the development of a supplemental online pronunciation course influenced by the Metacompetence-oriented Model of Phonological Acquisition. Phonological metacompetence is made up of declarative and procedural knowledge of phonology and phonetics. Wrembel (2005) has proposed an approach for teachers to help students improve their perception and production of English sounds by developing phonological metacompetence. The approach is made up of basic awareness-raising activities, articulatory control exercises, informed teaching techniques, and multimedia learning aids. She suggests that exposure to this knowledge will gradually improve students self-monitoring strategies. The goal of the online pronunciation course was fourfold: to help university students (a) develop meta-linguistic knowledge about pronunciation, (b) gain familiarity with cognitive and meta-cognitive strategies for improving pronunciation (c) develop self-monitoring skills, and (d) develop phonological competency individually and at their own pace. The online course was delivered using Moodle 1.9 and supplemented 3 sections (110 students) of a listening-focused, intermediate-level general English course for first-year university students at a private university in Western Japan. To achieve the four stated goals, a course was created on Moodle that introduced morae, phonemes, syllables, vowels, consonants, ellipses and elision, and stress. In the first and second stages of the project, the basic design of the course paired introductory readings with some practical activities, often highlighting differences between Japanese and English pronunciation. Pronunciation videos, images of articulators, and links to pronunciation games were often used. In the first stage, English was the language of instruction, while Japanese was used in the second stage. Throughout the course, students were asked in weekly post-topic surveys to respond about the topic. The presentation will share student reactions to studying about pronunciation in English and Japanese, examples of students' attempts to analyze their own pronunciation weaknesses, and student evaluations of the supplemental course. Finally, the presenter will talk about the third stage of the project, which is currently being developed.

Wrembel, M. (2005). Metacompetence-oriented Model of Phonological Acquisition: Implications for the Teaching and Learning of Second Language Pronunciation. *Phonetics Teaching and Learning Proceedings*. London University: University College London. Retrieved from <http://www.phon.ucl.ac.uk/ptlc2005.html/>

アメリカの大学生とのブログ交流と異文化コミュニケーション

Cross-Cultural Communication through Blog Exchanges with American University Students

塩見佳代子（立命館大学）

キーワード： ブログ交流 異文化コミュニケーション 異文化理解

本発表では、大学の英語 CALL クラスにおいて導入した海外の大学生とのブログ交流と、日英両言語におけるコミュニケーションおよび異文化理解に関する活動例を紹介する。

はじめに

外国語教育の現場においても最近、ICT や SNS を利用した活動を目にするようになってきた。これらはソーシャルネットワークを広げ、情報共有と発信力を促すツールとして使用される場合が多いが、今回はその中で Blog をもとにした異文化交流から学生が学んだことに関して報告する。

方法

2012 年の秋学期、米国コロンビア大学で日本語を学習している大学生が開設したブログに、立命館大学経営学部の CALL 2 クラスの学生がコメントを書き込み、1 名が複数の相手と約 2 ヶ月間ブログ交流を行った。ブログは日本語と英語の両方で作成されているが、日本人大学生は、日本語表現を教える以外基本的に英語でコメントを書き込んだ。

ブログ交流と異文化コミュニケーション・異文化理解

ブログ交流では、アメリカ人大学生の日本語によるプロジェクトへのコメントはもちろん、日本語や英語の表現およびそれぞれの文化に関する質問や応答が多く見られた。また、ブログ交流が進むにつれ、お互いの趣味や大学生活に関する質問、週末の過ごし方、あるいは時事問題に関する質問や災害に対する見舞いの言葉などが交わされ、一定の期間ではあったが学生は異文化コミュニケーションを体験することができた。

授業後のアンケートで、学生はブログ交流により以下のことを学んだと述べている。①相手の日本語学習における意欲を知り、自らの英語学習も積極的に行いたいと思った。②日英語の文法や表現が間違っても概要は伝わる。③間違いを恐れず学習した英語を使用することが大切。④TV や新聞、インターネットで見た相手国の時事問題を身近に感じることもできた。⑤英語のカジュアルな言い回しや省略表現、絵文字を学べた。⑥アメリカ人学生の日本文化への興味や日本語によるプロジェクトを読み、自分自身が日本文化の知識をもっと身につける必要があると思った。⑦同じ学生として課題やテスト勉強の難しさなど共感するものがあった。⑧日本文化に興味を持つ相手に対して親近感が湧いた。

今後の課題

今回は、アメリカの大学生が開設したブログへのコメント参加であったが、今後は日本人学生の英語によるプロジェクトの紹介やブログ作成を含め、SNS を利用して海外の学生と双方向に異文化交流を行う機会をさらに探していきたい。

多文化共生に必要な視座を育てるには？

Developing Perspectives that Contribute to Multicultural Understanding

フィゴーニ啓子（武庫川女子大学 非常勤講師）

キーワード：異文化理解教育、ステレオタイプ、参加型・体験型授業

実践報告

グローバル化が進み、多文化共生の時代を迎えている現代、日本の教育機関における異文化教育の果たす役割は重要である。しかし、高等教育機関では、異文化関連の授業は少数で、内容は多岐にわたり（山田、2009）、また、歴史も浅く、確固たる方法論がない状況である（川村、2000）。一方、海外では、教材開発、トレーニング、研究が盛んで、「ステレオタイプ」が異文化教育の中心的な課題であると言われている（川村、2000）。山田（2009）は、日本での望ましい異文化教育は、知識習得を目的とした講義形式のトップダウンアプローチではなく、James（2005）が提唱している個人の情緒面の発達や内面の省察につながるボトムアップアプローチ（参加型・体験型アプローチ）であると説く。筆者は、大学で、ステレオタイプに関する知見をもとに、参加型・体験型の異文化理解の授業を試みている。今回の研究大会では、ステレオタイプの知見や授業の実践報告とともに、教師の資質や役割についても論じたい。

参考文献

- James, Kieran. (2005). International Education: The concept, and its relationship to intercultural education. *Journal of Research in International Education*, 4: 313.
- 川村義治 (2000). 「第7章 英語科における異文化理解教育をいかに創るか」『異文化理解の座標軸』日本図書センター.
- 松尾知明 (2011). 『多文化共生のためのテキストブック』 明石書店.
- 山田礼子 (2009). 「多文化共生社会をめざして」『異文化間教育』, 30号, 12-24.

海外大学と成果を伴うオンライン交流を行うには： 問題の追究とその解決案

Conducting Successful Online Exchanges with Overseas Universities :
Problems and Possible Solutions

松島和佳子（大阪教育大学大学院生）・篠崎文哉（大阪教育大学大学院生）

上田愛（大阪教育大学大学院生）・鈴木翔大（大阪教育大学大学院生）

武部俊輔（大阪教育大学大学院生）

キーワード：facebook 国際交流 PAC 分析

はじめに

学習指導要領にもあるように、外国語を実際に使用する場面を考えれば異文化に対する理解を深めることは非常に重要である。しかし、いくら内なる国際化が進んできたと言っても、十分に異文化理解を深めることは依然として困難だと思われる。異文化理解をより効果的に深めるためには、目標言語（英語）を使い、直接異なる文化圏の人々と交流する場面の構築が求められる。

交流・活動内容

大阪教育大学は、英語教育学部の1年生を中心に、継続的に姉妹校であるアメリカの州立大学の学生と交流を行っている。本研究では、本学の学生20人と州立大学の外国人学生8人が世界規模のSNSであるfacebookを用いてコミュニケーション活動を行った。交流時期は2012年10月から2013年1月であった。facebookでの具体的な活動は、1) 週3回英語で2文以上tweetする、2) 月2回掲示されるディスカッショントピックについて英語で自分の意見を30語以上で書き論じる、というものであった。

調査について

大阪教育大学の学生の多くは、当活動が英語力向上や異文化理解促進に有益であると認識しているにもかかわらず、主体的に参加することが出来なかった。そこで、オンラインでの異文化コミュニケーション活動をより有意義なものにするため、まず調査を実施し、今回の交流における問題を明らかにした。調査方法は、参加者全員に対する事前・事後アンケートと参加者4人に対する事後における個別インタビューであった。特に後者については、個人に対する自己の再現性・信頼性の高い質的研究方法の1つであるPAC分析を用いた。その結果、「facebookの機能面に関する問題」や「交流参加者同士の親密度の低さ」等、活発な交流を行うことが出来なかった理由が明らかになった。

最終目的

本発表では、海外大学の学生とより成果を伴うオンライン交流を行うために、今回明らかとなった問題に対する具体的な解決案を示す。また、それに基づいた活動例を授業内、授業外など状況別に紹介、提案する。

動機づけを高める授業の中の有能感：質的研究による検討

Learners' need for competence in a motivational classroom : Qualitative analysis

田中博晃（広島国際大学）

キーワード：動機づけ，質的研究，自己決定理論

目的

本研究の目的は動機づけを高める授業の中での有能感の働きを捉えることである。動機づけを高める方略である「外国ドラマ・映画を用いたコミュニケーション活動」の改良版を用いて教育的介入を行い、学習者の内発的動機づけ（特に特性レベルの動機づけ）と3欲求（特に有能性の欲求）を高める試みを行った。その際に、その介入の中で学習者の英語授業に対する有能性の欲求の質的側面の詳細な把握を行った。

調査

日本人大学生 58 名に対して、15 週間の教育的介入を行い、プレ測定、中間測定、ポスト測定の3時点で動機づけと3欲求の変動を検討した。質問紙は3部構成で、第1部は外国語学習における動機づけの階層モデル（図1参照）に基づいた内発的動機づけに関する7件法の質問項目である。特性レベルの動機づけ（ $\alpha = .79, .77, .84$ ）、英語授業レベルの動機づけ（ $\alpha = .93, .91, .87$ ）、そして授業活動レベルの動機づけとしてリスニング活動（ $\alpha = .75, .72, .84$ ）とスピーキング活動（ $\alpha = .88, .88, .88$ ）である。第2部は3欲求に関する質問項目で、自律性（ $\alpha = .78, .80, .87$ ）、有能性（ $\alpha = .91, .91, .83$ ）、関係性（ $\alpha = .86, .94, .91$ ）の3つの欲求を各4項目から7件法による測定である。第3部は自由記述形式で、授業への学習者の取り組みの自己評価、および授業の感想を問う形式である。

結果の概要

改良版の方略によって、3つのレベルの内発的動機づけと3欲求が高まった。調査協力者の動機づけが高まったことから、自由記述データをKJ法にて分析を行い、動機づけが高まる授業の中での有能感の働きを探索した。その結果、以下の過程が示された。まず調査協力者は授業中に会話表現などの学習事項を実際に使うことで、学習事項が身につくという成果を感じる。その後、学習者は会話表現がだんだん分かってきたという実感を獲得することで、できるようになったという自信を獲得する。発表時は結果の詳細と教育的示唆についても論じる。

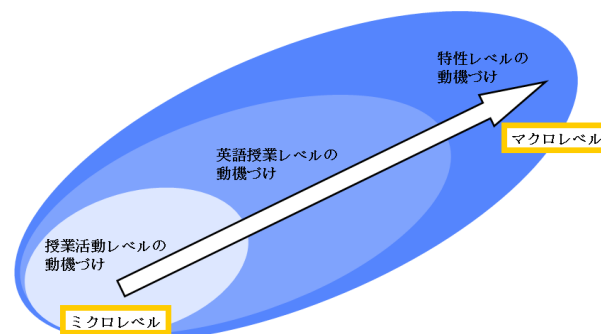


図1. 外国語学習における動機づけの階層モデル

日本人高校生の英語自己効力感を高めるとされる sources の感じ方

Japanese High School Students' Perception of the Sources
Predicting the Enhancement of English Self-efficacy

田原理恵（京都光華高等学校）

キーワード：自己効力感、sources of self-efficacy、英語学習

教師にとって、生徒の学習に対するモチベーション（動機）は、大きな関心事の一つであるが、中でも自己効力感が、学習者の学業成績に影響する重要な要素であることが明らかになっている（Pajares, 1996）。さらに、生徒の自己効力感の認識が、どのように学業遂行に変化をもたらすのかということに焦点をあてた研究も、心理学の分野でなされてきている（Pajares, Johnson & Usher, 2007）。Bandura (1997) によると、生徒は四つの sources (mastery experiences, vicarious experiences, social persuasions, physiological and emotional states) の解釈によって、自己効力感を発達させるという。自己効力感を高めるこれら四つの sources をどのように感じ取るかによって、生徒のもつ自己効力感が影響を受け、その結果、学習過程や成果にも違いがでることが分かっている。しかし、第二言語習得分野においては、この自己効力感を高める四つの sources を体系的に扱った研究は、筆者の知る限り、見当たらない。そこで本研究では、筆者がこれまで関わってきた高校生に焦点を絞り、彼らの自己効力感を高め、英語学習に積極的に関わる態度を育てるヒントを得るために、1) 自己効力感を高めるとされる四つの sources のうち、日本の高校生はどの sources が自己効力感を高めると感じるのか、また、2) それら sources の感じ方は、生徒の自己効力感の高低によって違いがあるのかを、質問紙で調査した。結果、自己効力感を高める要素としての vicarious experiences の認識が最も低いことが顕著に表れた。また、自己効力感が「高いグループ」と「低いグループ」の間で、sources に対する解釈の仕方に違いがあることも確認された。これらの結果から、生徒の自己効力感の底上げに大切なことが示唆できると考える。

Bandura, A. (1997). *Self-efficacy: The exercise of control*. New York, NY: Worth Publishers.

Pajares, F. (1996). Self-efficacy beliefs in academic settings. *Review of Educational Research*, 66, 543-578.

Pajares, F., Johnson, M. J., & Usher, E. L. (2007). Sources of writing self-efficacy beliefs of elementary, middle, and high school students. *Research in the Teaching of English*, 43, 104-120.

日本人 EFL 学習成功者の 自己調整学習方略と目標への関与に関する事例研究

Case studies on self-regulated learning strategy and goal oriented cognitions
of successful language learners in the Japanese FL context

吉田ひと美（同志社女子大学 非常勤講師）

キーワード：外国語学習成功者、自己調整学習方略、目標への関与

学習成功者に関する研究の背景

従来の外国語学習成功者（Good Language Learners、以後 GLLs）の研究は、優れた学習者が用いる特別な学習方略を抽出することを目指し、学習成果が高まった時期に使用していた方略を学習者の個性や学習の文脈から切り出して提示している。また、優れた学習者は常に高い動機を維持し、積極的に学習に取り組むかのように捉えられてきた。本研究はこうした先行研究における研究手法と学習成功者の捉え方を問題視することに端を発している。

本発表の概要

FL 環境の日本で英語学習に成功した GLLs を対象に、彼らの学習経験について、ライフストーリーの手法を用いることで、彼らの 1) 自己調整学習方略の使用と 2) 目標への関与の仕方を物語的に捉えようとした。また、英語に触れ始めた英語学習初期から現在に至るまでの一繋りの学習経験を対象として探求することで、過去の英語使用場面における成功経験や失敗経験と現在の学習成功者の英語に対する態度を結びつけて考察を進めることができた。本発表では、Zimmerman (1989) が挙げる自己調整学習を構成する 3 つの要素（自己調整学習方略、目標への関与、自己効力感）のうち、GLLs の自己調整学習方略と目標への関与を取り上げ、2 つを関連づけて議論する。例えば、学習成功者は最初から他の学習者より高い自己調整学習能力に優れているのではなく、個々の学習の文脈で様々な経験を通して時間をかけて自己調整学習方略を使用するようになることが観察された。特に、高校卒業以降の自己調整学習方略の使用頻度の高まりは顕著であり、大学受験までは学習が他律的であった GLLs も、時間やお金がより自由に使うことができるようになると、自分にあった方法で自律的に学習をすすめることが観察された。また、将来の計画の中に、英語を使う活動が組み込まれることで、学習動機が内在化され、目標に向かって自ら取り組む行動が起きる様子が確認された。本発表の最後では、学校教育場面で教師が学習者の自己調整学習行動を誘導するためにできることについて、本研究の事例研究により得られた示唆について述べる。

参考文献

- Zimmerman, B. J. (1989). Models of self-regulated learning and academic achievement.
In B. J. Zimmerman & D. H. Schunk (Eds.), *Self-regulated learning and academic achievement: Theory, research and practice*. 1-25. New York: Springer-Verlag.
- Griffiths, C. (2008). Strategies and good language learners. In C. Griffiths (Ed.),
Lessons from good language learners. Cambridge: Cambridge University Press.
- 竹内理 (2003). 『より良い外国語学習法を求めて——外国語学習成功者の研究』. 東京. 松柏社.

高校英語検定教科書の語彙

Vocabulary in English textbooks authorized by Japanese education ministry

古樋直己（津山工業高等専門学校）

キーワード：語彙，ESP，検定教科書

目的

本研究の目的は、高校時代に出会う語彙を明確化することである。

これは、理工系学生の科学技術英語習得促進を画策するための基礎を築くことにつながる。理工系学生の大多数はとくに大学入学前、科学技術英語を学習する機会が少ない。大学入学までに学習してきた英語は、一般的な汎用性のある英語 EGP で、大学の専門課程で接するのは専門的な英語 ESP である。理工系分野の学術論文や専門書など ESP に触れる機会が多い。

ESP では EGP 学習では出現頻度が低い語彙が頻出する。この ESP に対応する方法を考えてみる。英語力の構成要素さまざまではあるが語彙力は最重要要素のひとつである。単語を知らなければ始まらないというのを、語学学習者はよく口にする。

学習者は高校生時代に EGP は学習している。また、大学入学を果たしているため、完全ではないとしても、EGP はある程度習得していると考えられる。ここで高校の検定教科書を利用して、学習者が理工系の専門分野の英語に触れる前に、どのような語彙に遭遇してきたのかをまず確認する。これが今回の発表の目的である。

素材, 方法

101 冊の高校英語検定教科書を素材として出現する語彙を調べた。この教科書は、1998 年改訂版学習指導要領(2012 年度高校入学生まで適用)準拠の英語 I, 英語 II という科目用の検定教科書すべてであり、延べ語数は 81 万に上る。

展望

将来はさらに、ESP に頻出する語彙も明確化する。理工系学生が集中学習すべきは、ESP には頻出するが、EGP ではごく低頻度でしか出現しない語彙である。EGP と ESP それぞれの頻出する語彙が明確になれば、理工系学生が集中すべきは互いに重複していない部分に限定可能であり、学習の負担を軽減することができる。また、語彙だけではなく、その集合であるコロケーションも取り上げたい。今回はこの基礎段階として、まずは EGP の語彙を取り上げる。

参考文献

中條清美・吉森智大・長谷川修治・西垣知佳子・山崎淳史.(2007). 「高等学校英語教科書の語彙」. 日本大学生産工学部研究報告 B, 40, 71-92.

教員養成課程専門科目における教授内容知識の学習過程

Pre-service teachers' learning process on pedagogical content knowledge in a teacher-training course

亘理 陽一（静岡大学）

キーワード：教員養成課程、教授内容知識、英語学習法

要旨

本発表の目的は、教員養成課程1年次専門科目「英語学習法」の実践を通じて、教員養成課程の序盤における教授内容知識（Pedagogical content knowledge）の学習過程について報告することである。

教師は、常に新しい知識を求め、生徒や同僚との経験から学び続ける「適応的熟達者」であることが求められている（秋田, 2009, p. 46）。他方で教員志願者は、その実践の場に「参入」するために、養成課程で学ぶ間に一定の知識や指導技術を身につけておかなければならない。しかしながら教師教育研究において、彼らが諸能力をどのように伸ばし、適応的熟達者に成長し得るのかが十分に明らかになっているとは言えない。教員養成課程において何を学ぶべきかに関して研究者と実践者の間に合意があるわけでもない。

外国語教師が有すべき言語知識は、使用者の領域、分析者の領域、教師の領域に区別できる（Wright, 2002）。外国語としての英語教育における教師教育には「非英語母語話者の教師は、英語それ自体と教室での teacher-talk の十分な運用能力を身につけることが求められる」という特有の問題があり、教員養成課程においても使用者の領域を無視することはできない。その一方で教師は、成功した目標言語使用者であるだけでもその言語の仕組みを理解しているだけでも十分ではなく、それを評価・分析し、習得を促すように学習者にそれを提示できる水準の言語意識を持たなければならない（Jourdenais, 2009, p. 652）。しかしながら、教師の知識研究は大半が文法の宣言的知識に焦点を当てており、他の知識・技能や、英語教師が教科の知識を生徒に効果的に提示する方法、生徒が学習において抱える困難と教師がそれをどう手助けするかといったことに焦点を当てた研究は依然として乏しい（Tsui, 2011, pp. 28, 34）。

本発表では、英語教師教育の諸課題の解決の端緒をつかむため、当該科目における英語使用者の領域と英語教師の領域を往還させる授業構成・具体的展開について報告し、両領域の知識構築の連関を探る。

参考文献

- 秋田喜代美 (2009). 「教師教育から教師の学習過程研究への展開」 矢野智司・今井康雄・秋田喜代美・佐藤学・広田照幸(編)『変貌する教育学』(pp.45-75) 世織書房.
- Jourdenais, R. (2009). Language teacher education. In M. H. Long & C. Doughty (Eds.), *The handbook of language teaching* (pp. 647–658). London: Wiley-Blackwell.
- Tsui, A. B. M. (2011). Teacher education and teacher development. In E. Hinkel (Ed.), *Handbook of research in second language teaching and learning* (pp. 21-39). New York: Routledge.
- Wright, T. (2002). Doing language awareness: Issues for language study in language teacher education. In H. Trappes-Lomax (Ed.), *Language in language teacher education* (pp. 115-130). Amsterdam: John Benjamins.

フォーミュラ連鎖の反復学習が 文産出の流暢性と正確性に与える影響

Effects of Repetitive Practice of Formulaic Sequences on the Fluency and Accuracy of Sentence Production in L2: An Empirical Study for Japanese University Learners

下吉真衣（関西外国語大学 非常勤講師）

キーワード：フォーミュラ連鎖、言語産出、認知処理

発表内容

円滑なコミュニケーション活動を達成させるにはまず、話し手が伝えようとする内容を正しく理解し、その内容に対して適切な返答をしなければならない。すなわち、受容・産出スキルにおける文法的な正確性を習得する必要があると言える。さらに、会話のキャッチボールが問題なく続くよう、言語処理における自動性も獲得すべきである。そのためには、言語処理の量が鍵となる。反復学習は脱文脈化を促進し、言語情報を顕在記憶として定着させる。さらにインプットを繰り返せば、学習内容が長期記憶に潜在知識として内在化され、無意識的な言語処理が可能になる。(Kadota & Tamai, 2004; Towell, Hawkins & Bazergui, 1996)。しかし、ことばの理解と産出をほぼ同時に進めるという作業は、L2学習者にとって認知負荷が極めて大きい。この負荷を低減するのに役立つと推測されるのがフォーミュラ連鎖の使用である。なぜなら、フォーミュラ連鎖は語の定型表現であり、使用時に言語文法に基づいて生成されるのではなく、心的辞書から熟語として検索されるため、語彙単位での処理が不要となる(Nattinger & De Carrico, 1992; Wray, 2000; Wray & Perkins, 2000)。また、フォーミュラ連鎖はある特定の場面で頻繁に使用され、コンテキストに依存する傾向がある(Wray, 2000; Wray, 2008)。従って、L2学習者がフォーミュラ連鎖を習得すれば、認知的な負荷が少ない状態で各場面に相応しい文を産出できるようになるのではないかと推測できる。

上述の先行研究に基づき、本研究では、日本の私立大学に通う2回生31名を対象とし、フォーミュラ連鎖を繰り返し学習する時、文の産出における流暢性と正確性にどのような影響を及ぼすのかを実証した。実験結果より、フォーミュラ連鎖の反復学習が流暢性を高めることは明らかになったものの、正確性も高めるかは疑わしい結果であった。正確性の向上には反復学習のみでは限界があり、明示的な指導も加えるべきではないかと推察される。

参考文献：

- Kadota, S. & Tamai, K. (2004). *Ketteibaneigo shadowing* [The Shadowing in English]. Tokyo: Cosmopier.
- Nattinger, J. & DeCarrico, J. (1992). *Lexical Phrases and Language Teaching*. Oxford: Oxford University Press.
- Towell, R., Hawkins, R. & Bazergui, N. (1996). The Development of Fluency in Advanced Learners of French. *Applied Linguistics*, 17, 84-119.
- Wray, A. (2000). Formulaic sequences in second language teaching: principle and practice. *Applied Linguistics*, 21, 463-489.
- Wray, A. (2008). *Formulaic Language: Pushing the Boundaries*. Oxford: Oxford University Press.
- Wray, A. & Perkins, R. (2000). The functions of formulaic language: an integrated model. *Language & Communication*, 20, 1-28.

記号研方式に特化した言語構造式描画ソフト

「LangDraw 記号研 ver.」の試作

Prototypical Development of the Software, “LangDraw Kigoken ver.”, which
Specializes in Marking English Sentences in *Kigoken* System

木村修平（立命館大学）

キーワード：記号研方式 英文記号づけ LangDraw Sentence Diagram

発表要旨

本発表では、寺島隆吉の提唱する英文記号づけ方式である「記号研方式」を Windows 上で簡便に行えるソフトウェア「LangDraw 記号研 ver.」の試作開発版について発表を行う。「LangDraw 記号研 ver.」（以下、本ソフトウェア）では、記号研方式に基づく記号づけを主にマウスによる操作で簡便に行うことができる。英文への記号づけは、Sentence Diagram (The Reed-Kellogg System) に代表されるように、長年に渡って英語教育の分野で用いられている伝統的な手法である。日本では、寺島(2004)の提唱する記号研方式のように 英文に対する独自の記号づけの体系が生まれ、進化してきたが、その包括的な研究や専用作図ソフトウェアの開発は発表者の知る限りほとんど行われていない。本研究は、未だにほとんど手付かずの部分が多い英文記号づけという領域、中でもそのデジタル化に関する実践的研究として意義があると考えられる。

LangDraw 記号研 ver.の特徴

本ソフトウェアは、本発表に先立って開発された、文字列への記号づけを行うソフト「LangDraw」シリーズ（木村, 2012）の派生バージョンであり、次の4つの特長を持つ。

まず、記号研方式の要とも言える3種類の記号、すなわち英文内の語句に対する下線、半円囲み、四角囲みをマウス操作のみで行うことができる。第二に、記号づけを行った英文をベクタ形式およびラスタ形式の画像ファイルとして出力することができる。これは、作成した記号づけ英文を教材その他の用途で他のソフトウェアと組み合わせて使用することを想定している。第三に、本ソフトウェアで記述した記号づけ英文は、そのソースコードを XML 形式で出力することができる。最後に、その XML ソースコードは本発表に先立って開発された英文記号づけ専用ソフトウェア「LangDraw 3」によってインポートすることが可能である。LangDraw 3 では英文文字列とそれに付加された記号を分離して記述できるという特長を持つため、本ソフトウェアもそれに準じている。

LangDraw 3は現在プロジェクトWebサイト(<http://mep.papiko.com/index.php?LangDraw3>)において無償で公開されており、本ソフトウェアも同様に公開を予定している。

参考文献

- 木村修平 (2012). 言語構造式描画ソフト「LangDraw 3」を用いた英文法・読解授業の実践と評価. PC カンファレンス 2012 発表論文集, p87-89.
- 寺島隆吉 (2004). センとマルとセンで英語が好き!に変わる本一寺島先生の TM メソッド英語上達法. 東京: 中経出版.

Lexical decision task as a measure of Japanese learners' lexical fluency and accuracy

日本人学習者の語彙の流暢さと正確さを測定する語彙性判断テスト

松尾徹（近畿大学 非常勤講師）

Key words : lexical decision task, word recognition fluency, lexical accuracy

Validation of Lexical Decision Task

The purpose of this study is to validate lexical decision task as a measure of Japanese learners' lexical fluency and accuracy, specifically automaticity of visual word recognition. In both L1 and L2 research, word recognition is widely considered to be one of the most significant processes contributing to reading comprehension. Fluent reading comprehension is not possible without automatic word recognition of a large number of words (Grabe, 2009). Therefore, the number of studies in SLA, which attempted to measure this construct, has increased recently. (e.g., Mochida & Harrington, 2009; Segalowitz & Hulstijn, 2005; Segalowitz & Segalowitz, 1993, 1998). In order to measure automaticity of word recognition, a computerized lexical decision task is often employed. In this task, test-takers classify whether strings of letters are real words or non-words as quickly as possible. The lexical decision task produces two measures, reaction time and reaction accuracy. However, as Harrington (2006) argued that few studies utilized the two measures simultaneously to measure learners' lexical proficiency. This study employs the design of Harrington's (2006) study and examines how the two measures simultaneously serve to discriminate different learner English proficiency levels (between-subject levels) and the difficulty of the items on the basis of word frequency (within-subject levels) in Japanese context. Hence, this study focuses on investigating how reaction time and accuracy of visual word recognition in the lexical decision task differ depending on the participants' proficiency levels (19 Japanese university students, 20 Japanese English teachers, and 20 native speakers of English who served as a control group) and on the word frequency level (1K, 2K 3K, and 4K word families) of the stimulus words. In this presentation, after a brief description of visual lexical decision task and pertinent literature review, differences in the lexical accuracy and reaction time of the three groups are discussed based on the results of a one-way and two-way mixed analysis of variance (ANOVA).

Suspicious Activity in Extensive Reading : Student and Teacher Perspectives on using Moodle Reader

Moodle Reader を使った多読活動における Suspicious Activity 機能の活用

Derek R. Eberl (Juntendo University)

Aaron P. Campbell (Kyoto University of Foreign Studies)

Key Words: Moodle Reader, Extensive Reading, collaboration, cheating, perspectives

Abstract

The Moodle Reader Module is a plugin for Moodle designed to support extensive reading in institutional settings, currently being used in hundreds of classrooms around the world. While useful for individual classes, it is particularly attractive for managing extensive reading programs on a larger scale. Students read books, log into the site from any access point, and take short, timed quizzes designed to test whether or not they actually read the book in question. If passed, the student receives the word count for the book read, which is added to their semester target goal, making it very easy for teachers to track student reading activity for assessment purposes.

Also built into the design of Moodle Reader are features designed to minimize the possibilities for cheating, such as randomized quiz item delivery from a larger pool of questions, and one-time only quiz attempts. But one of the most unique and potentially useful of these features is an optional ‘suspicious activity’ function that flags possible instances of cheating. Whenever two or more students take the same quiz, at the same time, and at the same I.P. address, teachers are notified of the occurrence, giving them several options for how to deal with those instances. Among those are releasing automated cheating notices to the students via email, marking the quiz as cheated, and/or talking directly with the individual students involved.

The purpose of this presentation, therefore, is twofold: 1.) We will examine the process of using the ‘suspicious activity’ feature on Moodle Reader from the teacher’s perspective, showing how it works and explaining how to distinguish between students who are trying to game the system, versus those who may truly be collaborating with others or who were just innocently in the wrong place at the wrong time. We will also share personal experiences dealing with students and teachers on these issues, etc

お知らせ

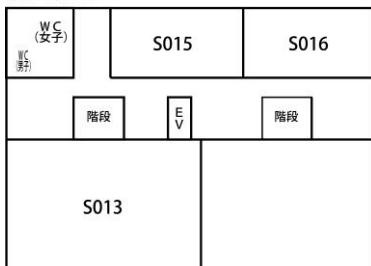
- 参加者は、受付にて必ず参加登録票にご記入のうえ、ネームホルダーをお受け取りください。LET会員は無料です。非会員の方は当日会費 2,000 円（大学院生は、学生証を提示していただくと 1,000 円）を受付でお支払いください。また、学部生は無料でご参加いただけます。なお、支部大会当日にご入会いただくことも可能ですので、支部事務局（受付）までお申し出ください。
- 当日キャンパス内の学食は開いておりません。周辺のレストラン等をご利用ください。
- 館内は全面禁煙です。
- 懇親会は同志社大学寒梅館 7F の SECOND HOUSE Will にて開催いたします。参加費は 2,000 円（学生 1,000 円）です。当日、受付にてお申し込みください。学生の方は学生証を提示してください。

会場への交通案内・会場案内図

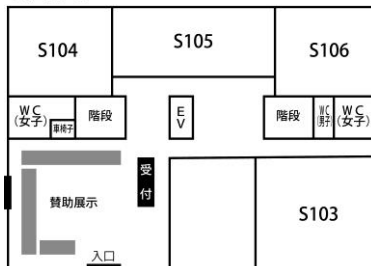
- 地下鉄烏丸線今出川駅 3 番出口を出て、右手に京都御所を見ながら東へ徒歩約 5 分。
 - 京阪本線出町柳駅 3 番出口を出て、鴨川を渡り、西へ徒歩約 10 分。
- ※東門に入ってすぐ目の前が純正館（会場）です。



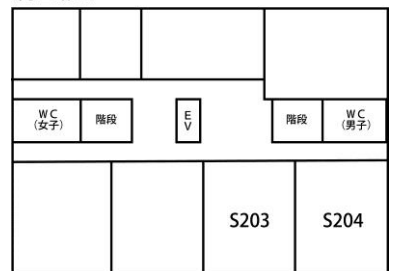
純正館 B1F



純正館 1F



純正館 2F



特長
1

ワンタッチで授業を
録画

簡単・手軽・高画質で
まるごと収録



特長
2

学生の反応をその場で
収集

学生の反応を瞬時に把握、
教室内で共有



特長
3

学生の反応を
分析・評価

授業の重要なシーンを
個別に復習



インタラクティブな学びを発見!

学習コミュニケーションツール

PF NOTE

パワーフィードバックノート

株式会社 **内田洋行** 教育システム事業部

環境マネジメントシステム規格 品質マネジメントシステム規格
株式会社 **内田洋行** は ISO14001・ISO9001 認証取得企業です。
●東京地区オフィス(新川オフィス・清澄オフィス・東横町オフィス・冬木オフィス)
●マーケティング本部 ●大阪支店 ●北海道支店 ●九州支店

ウチダホームページアドレス

▶<http://school.uchida.co.jp/>



東京 〒135-0016 東京都江東区東陽2-3-25 東日本機器営業部 ☎ 03(5634)6280
ICT東日本第1営業部 ☎ 03(5634)6402
ICT東日本第2営業部 ☎ 03(5634)6406

大阪 〒540-8520 大阪市中央区泉町2-2-2 西日本機器営業部 ☎ 06(6920)2480
ICT西日本営業部 ☎ 06(6920)2641

札幌 〒060-0041 札幌市中央区大通り東3-1 北海道営業部 ☎ 011(214)8611

福岡 〒810-0041 福岡市中央区大名2-9-27 九州営業部 ☎ 092(735)6240

名古屋 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-17-19 キリックス丸の内ビル2階 中部営業部 ☎ 052(222)7255